

平成29年1月25日 保幼小連携研修会～実践交流・講演～を実施しました。

今年度連携活動を担当している保育所・幼稚園年長児担任、小学校1年(2年)担任教諭、並びに小学校教育研究会生活科部教諭を対象に保幼小連携研修会を実施しました。

各連携協力校・園が中学校区ごとに分かれて実践交流し、グループ発表を行いました。交流の視点は、「①活動の中の子どもの学びや育ちを見取る」「②子どもの学びや育ちを支える教師・保育者の関わりについて考える」の2点でした。時間も短く実践報告が中心になってしまい、なかなか深める時間までとれませんでした。各校・園の連携活動をまとめた実践シートを配布し、保育者・教員が共に実践を振り返ることができ、今後の連携活動に大いに役立つのではないかと思います。

鳴門教育大学大学院教授の木下光二先生のご講演では、遊びの中の育ちや学びを見とり記録すること、そして、可視化することについて学びました。

参加園/校

永福保育園	朝来幼稚園	朝来小学校	中筋小学校
岡田保育園	池内幼稚園	余内小学校	三笠小学校
さくら保育園	倉梯幼稚園	池内小学校	明倫小学校
相愛保育園	シオン幼稚園	大浦小学校	福井小学校
なかすじ保育園	橘幼稚園	岡田小学校	由良川小学校
東山保育園	中舞鶴幼稚園	倉梯小学校	吉原小学校
八雲保育園	舞鶴聖母幼稚園	倉梯第二小学校	与保呂小学校
やまもも保育園	三鶴幼稚園	志楽小学校	(50音順)
ルンビニ保育園	舞鶴幼稚園	新舞鶴小学校	
うみべのもり保育所		高野小学校	
中保育所		中舞鶴小学校	
西乳児保育所			

実践交流

《青葉ブロック》

- 倉梯小学校・倉梯幼稚園
 倉梯第二小学校・ひばり幼稚園・森の子ら幼稚園
 与保呂小学校・さくら保育園
 三笠小学校・うみべのもり保育所・橘幼稚園
- ◎年長児は小学生の姿をよく見ていて憧れ、見ている中に学びもある。
 - ◎小学校を知ることで、就学への意欲が高まった。
 - ◎事前打ち合わせを実施し、教師・保育者が話し合うこと、年間計画に入れ回を重ねていくことが大切。
 - ◎小学校からも保育所、幼稚園に行くと就学もなめらかになるのではないかと。
 - ◎お客さんでなく、お互い一緒に活動できるようにしたい。
 - ◎一緒に活動する中で、何が育ったかを振り返る時間を持つことが大切。
 - ◎回を重ねるともっとお互いに力が発揮できるのではないかと。
 - ◎年長児は遊びの中でいろんな力、学びを持っている。それを小学校教師も知ること、指導者同士の関わりが大切。
 - ◎幼児がお客さんになるのではなく、互惠性のある活動にするため、課題を次年度に生かしていく。
 - ◎小学校、幼稚園がお互いの場所に行くことで学びも深まる。
 - ◎年間を通して連携をしていくことが大切。

《城北ブロック》

- 吉原小学校・相愛保育園
 福井小学校・ルンビニ保育園
 余内小学校・東山保育園・聖母幼稚園
 明倫小学校・舞鶴幼稚園・三鶴幼稚園
- ◎1.2年生→準備や計画をしっかりとし、保育園・幼稚園の子のことを考えることができた。
 - ◎年長児→「もっと遊びたい」「早く小学校へ行きたい」小学校への憧れ、期待感、安心感が持てた。
 - ◎小学校は事前学習で知ったことを年長児に伝え、年長児は自分たちの知っていることを小学生に知らせるなど、お互いの知識を伝え合う姿が見られた。
 - ◎数量の学習から「食べられる量はどのくらい？」と考えたり、「どうやって食べたかなあ」といえない時にも気にかける姿があった。(おいもパーティーの実践より)
 - ◎最初は1年生が声をかけられない姿があったが、交流を進めるうち、お互いに関わる姿へと変わってきた。
 - ◎ペアで一緒になって夢中になる姿があった。
 - ◎何が良かったか振り返りを深くすることが大切である。
 - ◎担任同士の交流、年間を通して計画を立てることが大切である。
 - ◎交流を通して一緒に何かをするという視点で見ることが出来る。
 - ◎今後は交流回数を増やしたい。
 - ◎春からそれぞれで共通した活動を行い連携活動につなげたい。
 - (例 あさがおを育てる→リース作り)



《若浦ブロック・加佐ブロック》

- 朝来小学校・朝来幼稚園
 大浦小学校・平保育園
 岡田小学校・岡田保育園
 由良川小学校・八雲保育園
- ◎リーダーシップをとれない子もグループの中では活躍することができた。
 - ◎小学校への憧れの気持ちが持てた。
 - ◎子どもの「やってみよう！」から活動につながる。幼児がしていることを小学生とも一緒にしたい。小学校でやっていることにチャレンジしてみたい。
 - ◎子どもが小学校と保育園の違いを発見できた。
 - ◎小学校ではものをセットしすぎてしまうが、子どものひらめきをつぶさないようにしたい。
 - ◎ねらいを絞って指導することで、子どもの様々なつぶやきが生まれた。
 - ◎小学生が教えるのではなく共に学ぶ。「教えてあげよう」は使わない。「協力しよう」「仲良くしよう」等の言葉を使うようにした。
 - ◎発信することの重要性。

第2回 保幼小接続カリキュラム策定会議 12月15日

第1回の内容を振り返り、改めて接続カリキュラムのイメージを共有した後、2グループに分かれて「保幼小連携の現状と課題」「育てほしい子どもの姿」について協議しました。幼児教育が小学校教育の前倒しではなく、保育所・幼稚園での育ちを引き継ぎ、学習への興味・関心へつないでいくこと、連携活動を通じて、保育者・教員同士が相互の教育の方法

や子どもの学びの姿を理解し合うこと、子どもの自信や自己肯定感をつなぐことなどの意見が出されました。一方で、主体的な遊びや体験から学ぶ乳幼児教育と、教えることが決まっており、受け身になりがちな小学校以降の教育の違いをどう越えていくか、といった意見もあり、双方の現状や課題を共有する良い機会になりました。こうした議論を深めることによって、実践に活かせるカリキュラム作成につなげていきます。



《城南ブロック》

高野小学校・永福保育園
中筋小学校・なかすじ保育園

池内小学校・池内幼稚園
◎回数を重ねるごとに子どもたちの距離も縮まったが、いつもと違う環境に戸惑っている様子も見られた。

◎1回目はぎこちなく小学生は小学生で年長児は年長児の活動が目立っていたが、2回目にはペアのお友だちの名前を呼ぶ姿や、一緒にしようとする子どもたちの意識もみられ、ペアの中で「僕はこれをするから〇〇君はこれをして」と、自分たちで役割を決めて進める姿も見られるようになった。

◎子どもたちの発想を大切に活動を進める中で、小学生がリードし目的をもって活動を進め年長児はついていく形となった。1年生ということで小学校では1番下であるが、年長児に対し優しい言葉をかけ教えてあげたりリードしたりする姿が見られ、年長児は幼稚園、保育園で1番上で頼られる立場が逆転し、色々なことを教えてい、沢山の刺激を受けている様子が見られた。いつもと違う立場、環境でそれぞれの子どもたちの様子や表情も違い、とても良い経験となった。

◎小学校や野外等で行い環境によって子どもたちの様子も違い、環境の大切さや、環境が影響することを改めて感じた。

◎小学生は自ら動く姿や、年長児に合わせた言葉がけや案を出す等、相手意識が芽生えたよう思う。

◎年長児は就学に向けた良い経験をさせてもらい、季節を感じられる遊びや自分たちの教育課程ではまだ経験していない工作等ができ、とても楽しめ良い経験となった。

◎交流を重ね、色々な発見があり、子どもたちも学び合うことができる貴重な体験、経験になったと感じる。

《白糸ブロック・和田ブロック》

新舞鶴小学校・昭光保育園・やまもも保育園
志楽小学校・タンポポハウス・志楽幼稚園
中舞鶴小学校・中保育所・中舞鶴幼稚園

◎保育所、幼稚園の子どもたちは、お客さんではなく自分から参加しようとしていた。

◎年長児からも、準備をしてくる子や、自分からやってみたく思う子が出てきた。

◎1年生のアイデアや発想を自分たちの遊びに取り入れていた。

◎年長児と関わることで1年生は自主性が高まり、おとなしい子も自分から関わるようになった。

◎1年生はリーダーシップを発揮し、優しく教えてあげる気持ちや期待を持つことができた。

◎単発で終わらず繰り返し経験することが大切。

◎顔合わせは1学期に園で実施することで良さが発揮できる。

◎活動のフィールドについては小学校だけでなく園での良さも生かしていくことで、普段からの遊びが発展する。活動場所は柔軟に考える。

◎ペアを作ることで安心感が得られた。

◎材料の置き方によって活動が変わってくる。子どもの発想を豊かにするために場をどう設定するかが大切。

◎子どもの想像力や応用する力を制限してしまうため準備のしすぎはよくない。

◎連携により、記録をとることは大切だと感じ、記録をとることで見えてくることがあった。

◎小学校ではできあがった完成品で評価することが多いが、生活科では過程をしっかりと見るという視点も大切で、作り出していく過程の中に気付きや学びがあると感じた。



講演「遊びと学びの可視化について」
鳴門教育大学大学院 木下 光二教授

連携活動は『してあげる』のではなく『一緒にする』それが互恵性
～木下先生コメントより～

【連携活動について】

◎連携活動では、子どもたちから「うれしかった」「やったー」「こんどいつくるの?」「いつやるの?」などという声が出ていたので、達成感、満足感を感じ自己発揮ができています。

◎『遊びの中に学びがあること』を保育所、幼稚園の先生から教わった。『結果ではなく、プロセスの中に学びがあること』を連携活動で学んだ。(中舞鶴小)

小学校の先生の学びになっている。

◎連携活動は、子どものための接続と、保幼小の先生達の学び合いがある。

◎保育所、幼稚園は徹底的に子どもに寄り添う。小学校の良さは客観的に子どもを見つめる。この両方を学ぶことができるのが連携活動。

◎保育所、幼稚園は変えてはいけないものもあり、変えなくてはいけないものもある。何を残して何を变えなくてはいけないか。連続性が大事である。

◎見えない学びはつながらない。園、学校がお互いの学びをよく見て、語り合うことが大事である。

【記録について】

◎遊び、育ちは子ども一人ひとりのもの。個が大切にされなければならない。

◎記録の中に個人名があるか。具体的なエピソードが入っていること、個の学びを記録することが大事である。

◎小学校は森(全体)を見て、保育所、幼稚園は木(個)を見ている。漠然と見るのではなく、個の学びを見る。木も森も見えたら一番よい。

◎同じ活動を見て、保幼小がお互いにどう評価するか。それぞれの違いに気付き、共有することで学びになり、記録が学びの手がかりとなる。

◎『〇〇をしたではなく、何を学び何が育ったか』を記録によって明らかにし、お互いの学びをよく見る、語り合うことが大事である。

◎子どもたちは実に豊かなことをしている、やっている。教師は勝手な判断をしてしまう。見て分らなければ子どもに聞けばよい。

◎長い目、広い目、基本の目で記録を残すことが大切である。

◎「豊かに会話をしていた」「楽しそうに会話していた」と書いても伝わらないが、写真・会話を並べてみると何を学んでいるかがわかる。会話から探求することで、関係性が広がっていく。

【次年度に向けて】

◎交流活動は、やりっぱなしで終わりがちだが、市全体で振り返る時間を持ち、活動シートのまとめを作った。大きな成果と言える。来年どのようにステップアップさせるか、今年の成果を来年につなげることが大事である。

◎リアリティのある学びを、いかにバージョンアップしていくかが大事である。

